

山本遼

東京大学教養学部理科一類一年

6月27・28日に、長野県にある2つの戦争遺跡を見学する企画に参加させていただいた。

1日目は長野市内の「松代大本営跡」を見学。内部には明かりがとまり、所々に説明のための案内板も設置されており、当初の予想よりはかなり整備されているという印象を受ける。自分の地元の鍾乳洞に幾度か入ったことがあったため、洞窟の暗さやひんやりとした空気には一種の慣れのようなものがあるが、これが人力で掘削されたことには驚くほかなかった。終戦時にはかなりの部分が完成していたという話だが、事前に目を通しておいた資料からは想像もつかないスケールであることは、見学者用の通路を歩くだけでも伝わってくるようだ。案内板の前では、俊英高校の土屋教頭先生や生徒たちによる説明を聴いた。史跡の紹介・保存運動を地元の学校が進んで行うという試みである。

お昼には「れきみちの家」という立派な資料館に案内していただき、その後、地下壕を利用して造られた地震観測室を訪れた。

松代を離れ、次に向かったのは信濃毎日新聞社屋。会議室でディスカッションに入る。ここでは、増田記者に、実際に長野で働いたという人々のもとを取材で訪れた時の様子を伝えていただいた。

山に囲まれたあの静かな場所が、広くアジアの国々の人々までつながっていることはわかに想像できないが、数多くの史料がそれを示している。今問題なのは、それをどう捉え、どう伝えていくかだが...見学参加者に様々な年齢層（および戦争体験）の人がいたためか、議論は非常に面白いものになった。とくにいわゆる「ネット右翼」の実態が、「戦争を伝える」うえで考えなくてはならない一つの問題として浮き彫りになった点は興味深い。

思いがけないことに、壕内だけでなく土屋先生や案内役の生徒たちも含めた、松代大本営跡の見学の様子や、見学者としてあるべき批判的態度を一度冷静になって考える時間にもなった。

2日目に訪れた松本市の地下壕（三菱重工の工場建設跡地）は、理由はよくわからないが、堆く積まれたゴミ（戦争遺跡と直接は関係ないだろうが、ゴミの山を間近に見たのも初めての経験で、小規模とはいえ衝撃的だった）と急な山の斜面を登らねば辿り着けないような、つまり一般の人の目には留まらないようなところにある。

壕内も、松代とは打って変わって凸凹だらけで、照明も設置されていないため、気軽に「歩く」のは難しい。ここでは案内して下さった松本第一高校の平川先生に従い、

壁に残された落書きのうち、象徴的とされるものをいくつか巡った。壕の最深部で完全に消灯したときには、なんとも不思議な感慨を覚えた。

壕を出た後は、松本第一高校で、近隣の戦争遺跡の保存運動などについてお話をいただいた。戦争遺跡を歴史史料としてみるべきか否か、また、それを保存することの意義もまた人によって様々であることを知った。平川先生は、解説をする様子などを見ても本業が理科の教師とは思えないほど、「強制労働調査団」の活動を積極的に行っているようで、松代や松本以外にもたくさんの戦争遺跡を紹介してくださった。このような遺跡は日本全国にあるそうなので、折りをみて自分の地元についても調べてみようと思っている。

内藤拓真

東京大学教養学部文科三類一年

「戦争遺跡」という言葉が立花先生の口から出た時、正直特別な響きは感じなかった。物よりも人のほうがWar Memoryを強く伝える。

日本人にとって、戦争のリアルは語り部の語りの中にしかない。

被爆者やひめゆり学徒。彼・彼女らの語り以上に私たちの身に迫る形で戦争の記憶を伝えられるものはない。

これが私の持論だった。

だから、遺跡に対して、見て何かが変化するかインセンティブを得られるとか、あまり期待してはいなかった。

実際に松代の地を踏む。

山梨県出身の私には見慣れた田舎の風景。密度の低い町。

こんな辺境に天皇をはじめとする国家の中枢機関を移転しようという、その考えに疑問を感じざるを得ない。

大本営の暗い坑道内に足を踏み入れる。

人間が身を屈めずに歩いていける。

沖縄で見たガマはかなりの広さであったが、あれは自然洞窟だ。

こちらは人間の力による。掘ったのは徴用された中国人や朝鮮人という。

案内をしてくれる高校生には驚かされる。半端な気持ちではやっていない。

私たちの細かい質問に回答できる、その理解度の深さに松代への思い入れを感じた。
私たちの質問も、なんとか当時のイメージを掴もうというものだった気がする。

天皇の御座所を窓越しに覗く。

畳には菊の御紋が刻まれていた。家財はほとんどそうだとする。

振り返って山に囲まれた小さな集落を見下ろすと、当時の様子がなんとなく想像できた。
何の変哲もない田舎の集落に、突然、トラックが騒音を立てて何かを運び込んでいく。
農作業を行う現地の人々も異変に気づき始め、そのうちに誰かが「菊のご紋の家財が運び込まれている」と言い始める。

「天皇が来るのか」そんな噂に村中が騒然とする。

大戦末期の、疲弊したルーティーンの日常を切り裂く突然の異変に包まれる村落と人々。
そんな映像が思い浮かんだ。

翌日の地下工場跡は激しかった。

こちらは屈まなくては進めない。

労働者はこの岩むき出しの足場を裸足に近い状態で作業したと言う。

行き止まり、つまりそこで終戦、作業が終わった壁面の前に立つ。

荒々しく彫られた壁によくわからないけど生々しさを感じた。

これはもう **Seeing is Believing** だと思う。実際に行かないと理解できない感覚。

全体として感想は、「なめていたな」ということ。

今回の旅を通じて、追体験とはいかないまでも、実際に見ないと分からないものを確実に感じた。

この壮大さは本当に想像していなかったものだった。

実際に遺跡に身をおくことで、想像力は広がる。

当時の光景がふと迫って見えることがある。

私としては想定外の収獲が得られた二日間であった。

小倉愛未

東京大学教養学部文科三類一年

ひりき

なにもなかった

できることは

なすべきことは

なにもなかった

どうしようも

なみだも

そうぞうも

ことばも

そして このむねのいたみさえも

ほんとうに なににもならなかった

わたしになにができたというのだろうか

せんそうをしらぬ

いたわりをしらぬ

ただ いまにあまえているだけの

この わたしに

かわいそうといったところでなんになろう

それはたんなるぎぜんだ

それはたんなるしばいだ

もしわたしがかれらだったら

おもったところでどうにもならぬ

かれらにはなれぬ

かれらのくるしみを かなしみを いたみを

わかちあうには わたしのそうぞうなどたかがしれている

かべにかかれたじゅうじかに

かえりみられることのなかったかれらのなみだ

ひりきなわたしは

ただいのることしかできぬ

ばかのひとつおぼえのように

おみまもりください

ただ わたしたちがおなじあやまちをくりかえしませぬよう

おみまもりください

ただ わたしたちがおなじちをながしませぬよう

おみまもりください

ただ わたしたちがおなじひとなのだときづくよう

おみまもりください

おみまもりください

おみまもりください

遠藤 駿

東京大学教養学部文科一類一年

私は戦争を知らない。

祖母から艦砲射撃の話を知ったり、テレビで戦争特集を見たりしたが、それでも常に実感というものが伴わなかった。よりどころのない妄想の世界でしかなかった。

何千万人も死んだという情報も、実感が伴わないという点からいえば、交番の前に掲げている「昨日の交通事故死亡者数」と似たようなものだった。

しかし、今回実際に松代大本営や地下工場跡という、当時の雰囲気は今にリアルに伝える戦争遺跡の中に入り、そこを研究している方々からお話を伺うことで、少しそれが変わった。

松代大本営では、地下に広がる巨大な空間に驚いた。

時々現れる格子で閉ざされた横道の先を懐中電灯で照らすと、まだまだ先は続いており、その規模に呆然とした。

本土決戦という無謀な作戦を本気で考えていた人々がいたのだということを実感した。また現地で調査活動を行っている俊英高校の生徒の方々と教頭先生から、実際の工事の行程や、そこで働いていた朝鮮人労働者の様子などの説明を受け、平らでないごつごつした岩肌と重ね合わせ、そこで働いていた人たちに思いをはせた。

信濃毎日新聞の増田記者による講演では、被害者と加害者の複雑な関係というものに対して自分なりの考えを深めることができた。

松本の地下工場跡では松代大本営とは違う全く未整備の遺跡内を歩かせてもらうことができ、当時の日本の窮状や戦争の悲惨さを体感した。

そして、照明のない闇の中を、懐中電灯をたよりに歩くというのは、新鮮な体験だった。

全員で懐中電灯を消したとき、私は人生で初めて本物の暗闇を体験した。

瞳孔が全開に広がっているのを感じるのだが、それでも何も見えない。こんな体験をすることはもう二度とないだろう。

俊英高校の生徒は「意見を押し付けるつもりはない、ただ考えるきっかけになれば。」と言っていた。私が経験したように、その試みがより多くの人にとっての、平和について考えるきっかけとなることを願っています。

岩崎陽平（元東大立花ゼミ生）

今回、私が戦争遺跡見学に行ってみて思ったのは、硫黄島での地下壕作戦や、沖縄での本土決戦を髣髴させるような、大本営移転という、壮大で怖ろしい計画が、軍によってすすめられていたという事実です。実物を見ることで、そのスケールの大きさを大いに感じることができました。

象山地下壕（イ地区）は、建設計画がわずか半年間あまりだったのにもかかわらず、大人が屈まずに楽に入れるくらいの完成度があり、赤く塗られた鉄骨と、敷き詰められた材木が印象的でした。しかし、数千人を収容する空間が形成されたことはいいとしても、大本営として、どれくらい機能するかについては疑問が残りました。

松本地下工場跡は、松代大本営の10倍ほどのコストを費やして、開発されたと、案内していただいた平川先生はおっしゃっていました。にもかかわらず、現在の様子は、ひどく荒れていて、入口にたどり着くまでにゴミの山を登らなくてはならず、管理が不十分だと思いました。

松本の地下工場跡は、松代大本営跡と異なる点がいくつかありました。

ひとつめは、岩石の質の違い。

大本営跡は、表面がざらざらした砂岩だった一方、地下工場跡は、触れるとすぐに崩れてしまう火山岩でした。

ふたつめは、照明の有無。

観光地として、多くの人に知られるようになった大本営跡は、長野市が管理していて、通路に白熱灯が設置されていたので、真っ暗闇ではありませんでした。電話もありました。地下工場跡の方は、しかし、正真正銘の真っ暗闇で、懐中電灯がなければ、全くといって先に進むことができそうにありませんでした。高校生を案内するときに必ずやっているという、「本当の暗闇」を体験することもできました。

中学生のとき、ひめゆりの塔の洞窟をみた私にとっては、二度目の暗黒体験でした。

松代大本営と松本地下工場という、二つの対照的な戦争遺跡を訪れてみて感じたのは、二十世紀中頃に日本という小国がおこなった<戦争>の無謀さと、<終局>へ向かう日本軍の儚さでした。

窪田史朗

東京大学理科一類一年

私は飛行機やロケットが好きです。ご存知の通りロケットや飛行機の歴史は、戦争と密接に関わっています。特にロケット（＝ミサイル）は、実質的に第二次大戦中に原形が出来上がり、冷戦によって成長しました。そんな理由もあってか、私は以前から第二次大戦や冷戦に興味があって、第二次大戦を扱ったNHKのテレビ番組などは、結構熱心に見ていました。

しかし私の知識にある太平洋戦争は、大局的で大雑把な「背景」でした。「本土決戦」「一億玉砕」をスローガンではなく実際に実行する為の準備が、あれほどの規模で、しかもあそこまでの完成度で行われていたと言うのは、立花先生に聞くまで全く知らなかったのが、大変な驚きでした。もっとも、松代の大本営や天皇御座所の移転予定壕が果たして"一億玉砕"の為の準備だったのかについては異論があるようではありますが。

大本営が入る予定だったという、象山地下壕だけに限っても総延長は6000m近くと言いますから、工事開始を1944年10月からとしても、およそ300日間で大雑把には1日20mも掘っていた計算になります。

あの岩盤をあんな工法で1日20m掘り進むなんて信じられません。しかしあの整っていない、ほとんど掘ったままだと想像させる壁面は、如何にも突貫工事である雰囲気を感じさせました。

対して舞鶴山の天皇皇后用退避壕は、階段を下りて上っただけですが、壁面がコンクリートで滑らかに打ってありました。

とても63年前のものには見えず、最初私は「気象庁が使う為に安全対策を施したんだろうな」と考えていました。ところがこれは当時のままで使っていると説明を受けて、そのこと自体に驚くと同時に、大本営用の壕との落差にも驚きました。

私のような若い日本人にとって、第二次大戦までの天皇の絶対性というものを想像することは困難でしょう。少なくとも私には「現人神としての天皇」の具体的なイメージはありませんでした。それが、当時の日本の陸海軍の最高司令部であった大本営と、天皇皇后の退避壕の差として、極めてリアルに感じられました。

さらに松本の金華山地下工場予定地跡は、松代の二つの壕と比べて地質的な条件が悪いことが、素人目にも明らかでした。

壁は触っただけで崩れてくるような脆いものでしたし、天井が崩れている場所も複数ありました。大きな岩の塊が剥落しそうになっている場所もあって、たとえあの壕が100%まで完成したとしても、安全性の点で大本営の壕とは比べ物にならなかっただろう、と想像しました。

天皇>軍の最高幹部たち>工場の技術者労働者という図式が、露骨に壕の差に現われているのが、なんとも凄まじかったです。

俊英高校の土屋副校長と郷土研究班の皆さん、松代壕での説明ありがとうございました。れきみちの家でのお話も大変参考になりました。信濃毎日新聞社の中馬主筆、増田記者とのディスカッションも、非常に面白かったです。たった60年前のことでも、分からないことだらけだと言うことが良く分かりました。松本第一高校の平川先生のお話は非常に詳しく、特に地質や工法の詳細についてのお話は非常に興味深かったです。

南さくら

東京大学工学部3年

松代大本営跡と里山辺工場跡の見学、大変勉強になりました。

貴重な体験をさせていただいてありがとうございます。松代大本営跡では俊英高校の皆さんが手作りの資料を使った丁寧な案内のおかげで、楽しく見学させていただきました。里山辺工場跡のほうは、雨に濡れながらゴミの山を登ったりロープをつたって山を登ったり、洞窟の入口に気色の悪いじめじめした葉っぱの山があったりと、整備がされていない危険なところがたくさんあって、生々しく印象的でした。とりわけ、そこが公営化されておらず、有志の方々の努力によって営まれているという点が心に残りました。公営化されていないと何かと大変そうですが、だからこそ訴えてくるものもあるのかもしれないと思いました。

今回の見学会を通して信毎新聞の記者の増田さんや松代高校の平川先生、俊英高校の教頭先生の松代大本営跡に対する見方を聞いたわけですが、みなさんの論点・視点の微妙な、あるいは大きな違いが大変印象的でした。わたしは在日朝鮮人の学生との交流のなかで、彼らの日本の戦争責任に対する彼らの考えをじかに聞いたことがあるのですが、彼らの意見と一般的日本人の意識のギャップにもショックを受けていたところでした。本当にいろいろ!こういう風に考えると、戦争という実態はどこにもなくて、私たち一人ひとりが現在進行形で考えているものの積分のようなものなのかという気がします。これから私たちが戦争は何であったかを考えていくうえで、日本の戦争責任を重く見る意見と、単純に戦争加害の象徴というわかりやすいレッテルを張るだけでなく、地元の人々の視点をもっと重視してゆくべきという意見、どちらかだけ聞いてもう一方を無視するのでなく、両方の意見を聞き、さらに、また新たな角度からも見ようとする姿勢が必要だと感じました。

われわれが今どんな時代に生きているかを知る上で戦争について知ることは必須ですし、また単純に、戦争に対する見方は人によって全然違って大変興味深いと思います。しかし、私のまわりには戦争と自分が生きている現在とのつながりを感じている人はごくわずかしきません。戦争について学ぶことの価値や面白さをいろいろな人に知ってもらうためにも、とりあえずまずは身近な人に、松代の見学会のことを話してみようと思いました。

関 翔平

東京大学教養学部文科三類二年

60年前確かにあった、太平洋戦争のリアリティーを僕らが感じるのはどんな時だろうか、と考える。祖父から聞いた、軍での暴力の話、朝から晩まで万里の長城を警備していたという信じがたい話。街中で怒声をあげる憲兵の話。日本はあの時代からずいぶんと変わったけれど、記憶が、そして体験が未だに生き残っている事は確かだ。映画館に行って、フィクショナルな映像を目にする機会も多い。『男達の大和』、『俺は、君のためにこそ死ににいく』、『硫黄島からの手紙』などなど。主演は窪塚洋介や中村獅童。戦時中に繰り広げられたであろう、激しい戦闘シーンや人間同士の関わりの中に、同時代人がぼん、と配置されている。映像を目の当たりにして、何かを感じる。あくまでフィクションであり、演出過剰や現実とは違う描写がある、という批判もあるだろう。しかし形はどうにせよ、「あの戦争」はいまだに語られている。人によって、また作品によって語られ、議論を巻き起こし、人々に何かを考えさせ続けている限り、戦争が遺した教訓は時代を超えて伝えられてゆく事だろう。時代が「あの戦争」に背をむけ、もはや何も語らず、沈黙してしまうことがなによりも恐ろしい事ではないかと思う。

今回の松代大本営見学では、「沈黙した語り部」である戦争遺跡の意味に気づかされた。生き残っている戦争体験者はいずれいなくなってしまうし、時代がかけ離れるにつれ、例えば映像作品は太平洋戦争を問題化する機会を徐々に失ってしまうかもしれない。しかし戦争遺跡は、もの言わず厳然としてそこにある。トンネルの冷えきった空気、突き刺さったままのロッド、荒削りな壁面。

爆撃を防ぐための厚いコンクリートの向こう側に見える、小さな天窗。肌で感じる、戦争の風景が確かに残っている。

いかに遺し、どのような視点で伝え続けてゆくか。課題は多いかもしれないが、沈黙した語り部のそばで、「あの戦争」について語り続けてゆくことが、今必要なのだと思う。